

富山県とやま富山立堀川ほりかわ小学校 六年

知る^しこと、それが第一^{だいいっ}歩^ほ

吉越よしこし
帆高ほたか

「ごめんねはいらないよ。ありがとうだけでいいよ。」

これは、宿泊学習で急な坂道を登る時、後ろから押してくれた友達がかけてくれた言葉です。ぼくは生まれつき足にまひがあつて歩行器や車椅子を使って生活しています。友達に助けてもらうことも多く、ぼくはいつも、「ごめんね。」と言っていました。でも、このときの言葉で、仲間として認めてもらえていることを実感して、この仲間と出会えて良かったと思つたことを今でも覚えています。

小学校に入学した時、それまでは療育センターに通つていて障害のある子としか過ごしたことがありませんでした。ぼくは支援級なのですが、交流級にも行くことになりました。初めて行く時はみんなの迷惑にならないかとか、一緒に過ごしていけるかなど、とても心配で不安でした。けれど、すぐにみんな話しかけてくれ、とてもほっとしました。しかし、いやなこともありました。それは、周りのみんなに「どうして歩行器を使っているの。」と、ひんぱんに聞かれた

ことです。当時はどうやって答えればいいのか分からず、泣いてしまつたり黙つてしまつたりしました。でも、勇気を出して答えているうちに、聞いてくれた子が周りの子に教えてくれたり、「街中で車いすとか使っている人を見てもおかしく思わないようになったよ。」と言つてくれたりして、みんな、ぼくを理解してくれようとしていた証だつたのだと分かつて、いやな気持ちもなくなり、自分から笑顔で説明できるようになりました。

みんなの気持ちがわかつて、学校でもいろんな行事に積極的に参加できるようになりました。運動会も、ぼくが団にいたら徒競走などのポイントを落としてしまうのに、誰もいやな顔をせず走り終わるまで「がんばれー。」と一生懸命応援してくれて、全力で走り抜けることができました。宿泊学習にも参加して、みんなの助けもあつて、できる範囲でみんなと一緒に活動することができています。

ぼくは今年六年生です。中学生からの自立ということもあ

り交流級に行く機会が増えました。それに伴ってみんなに助けてもらう事がますます増えていきます。だからぼくは「ごめんね。」ではなく、「ありがとう。」を精一杯言うようにしています。そして、ぼくもみんなのために、誰かが困っていたら声をかけてあげたりなど、自分に出来ることを積極的にがんばっています。

時々、ニュースで障害者を差別するような事件を聞くことがあり、ぼくはとても悲しい気持ちになります。ぼくは障害という言葉があまり好きではありません。障害の壁をなくそうと言っているのに言葉で区別ばかりしてはいつまでもその壁はなくならないと思います。ぼくが小学校で学んだことは、自分のことを知ってもらうことが大切だということです。みんながぼくのことを知ってくれたから、今とても楽しく学校に通っています。だから、障害のある人は、積極的に自分のことを知ってもらうようにした方がいいし、そうじゃない人は周りの障害のある人のことを積極的に知るようにして欲しいです。もし周りにいなくても本や新聞記事などを読んで関心や興味を持ってもらえれば、先入観や偏見などではなく本当のことがわかると思います。そうすれば、ぼくと学校のみんなのように、仲間になれると思います。これは障害のことだけではなく、肌の色や性別なども同じだと思えます。そういうことに関係なくその人自身をお互い知るようにすれば、みんな

が世界の一員として幸せになれると思います。だからぼくも、これからも積極的に自分のことを知ってもらい、また自分も周りの人のことを知るようにしていきたいです。それが、第一歩になるからです。

仙台市立南中山中学校 三年

ともだち
友達としてひだ
飛田
あいね
愛音

4年程前、私が小学生だった頃に友達ができた。その友達は障害をもった一歳年下の笑顔が素敵な女の子だ。初めは「障害をもった女の子」と思ってた接していた自分がいた。しかしその考えが間違っていることに気付かせてくれた。

私の通っていた小学校には障害をもった子達のためのクラスがある。そのため校庭で遊んでいる時や学校内で障害をもった子達と会うことがあった。しかし話すことはなく時々目が合うだけだった。そんな日が続いたある日のこと。私が休み時間に校庭で遊んでいると女の子が話しかけてきた。彼女は、

「一緒に遊ぼう。」

と優しい口調で誘ってくれた。話し方や顔立ちから障害をもっていることが分かった。目が合ったことは何度かあったけれど話しかけてくれるのは初めてで驚いた。しかしその気持ちよりも話しかけてくれたことに対する喜びの方が大きかった。私は、

「いいよ、何をして遊ぼうか。」
と言うと

「すべり台が良い、すべり台で遊ぼう。」

と嬉しそうにはしゃいでいた。時間はあっという間に過ぎ休み時間の終わりを告げるチャイムがなる。私達は次の授業に向け各々の教室に戻る。すると別れ際、彼女は言う、「楽しかったね。また遊ぼうね、私達友達だね。バイバイ。」と。私は手を振って教室に入っていく彼女を見てはっとする。そうか私達は友達なんだ。障害をもっている人と障害をもっていない人という関係ではない。友達なのだ。私は彼女が見えなくなる前に、

「私も楽しかった。友達になってくれてありがとう。」

と大きな声で伝えた。彼女は最後まで手を振り返してくれた。

この日、私の中で障害に対する考えが大きく変わった。私は勝手に壁を作ってしまった。彼女は障害をもった

いるから私とは違う、私達は友達になれないという心の壁を。しかしこの考えは間違っていると彼女は気付かせてくれた。障害という壁はないのだ。障害をもっている人も障害をもっていない人も支え合わなくてはならない。だからこそ壁を作るのではなく手を差し伸べる、いつだって私達は仲良くなれるなど、障害に対する考えを改めていくべきなのだ。そうすれば障害をもった人達はもっと楽しく生きやすい未来が待っていると思う。

あの日、私に大切な事を教えてくれた彼女にありがとうと伝えたい。彼女はもう「障害をもった女の子」ではない。私の大切な友達だ。

金さんへの誓い

延泰世

懐かしい潮の香りがしています。金泰九さん、三年半ぶりですね。永遠に大好きです。私は春に高校生になりました。金さん、制服姿の私が見えますか。私には金さんがはつきり見えます。声もちゃんと聞こえます。

私は、母のお腹にいる時から、ここ瀬戸内海の小島にある（ハンセン病）療養所に来て、金さんにお腹をさすってもらって、この世に生を受けました。父は、子どもをつくらなかった金さんの「泰」の字を私につけてくれました。「おまえが九十才まで生きるとすれば、その間、金泰九が差別に抗い、それに屈せず、国籍や民族に関係なく、多くの人を愛し、多くの人に愛されて生き抜いた証を伝えることができる。」と。

私には金さんの命が宿っています。家族やふるさとに帰ることが許されず、絶望にあえいでこの島で生きた金さんの仲間たちの命も受け継いでいます。金さんたちは、それでも、仲間と共に励まし合い、自ら生きがいを見出して、

力強く、この島で生き抜きました。その強さも私の命に宿っているはず。だからこそ、私が必ず語り継ぐと決まっています。

いま、金さんのこんな話を思い出しています。「大阪に残してきた妻が病に伏したと伝え聞いたが、絶対隔離政策のため療養所が帰省を認めず、妻の死に目に会えなかったことが一番悔しかった。もしあの時、帰ることができていれば、妻は死なずにすんだかもしれない。」金さん、愛するその人に会えましたか。

「ここ（膝の上）において。いっしょに写真撮ろう。」金さんはいつも私にそう言ってくれました。私はうれしくて、ワクワクしてすぐに、私だけの「特等席」に行きました。手もとにある写真はすべて、金さんも私も笑顔です。そこは、金さんのすべてを全身で感じられる、私のいちばん落ち着く場所でした。そこにいるとちよっぴり、キムチとおじいさんの匂いができて・・・私はそれが大好きでした。

金さんの手の指は、医療の不備もあって切断されていますが、金さんはその指のない手で私を包み込んでくれました。私はその手も大好きで、ずっと握っていましたね。

二〇一六年十一月末、金さんはこの世を去りました。父から知らされた時、頭が真っ白になりました。「嘘であつてほしい」と思いながら、すぐに母と療養所に向かいました。

棺に眠る金さんを見ると涙が溢れました。冷たくなった金さんに触れると、金さんとの思い出が蘇ってきて、声を出して泣きました。そして、「ありがとう」と「さようなら」を繰り返していたことだけを覚えていきます。

金さん。私はまわりに流される性格です。でも、変わります。私も金さんのように誰にでも平等に接する人になります。どんな人をも心から愛する人になります。自分でやると決めたことはやります。人を傷つけ悲しませる社会の偏見や差別に対して、ダメなことはダメだと言える勇氣を持って毎日を送ります。

いま、新型コロナウイルス問題で医療従事者やその家族が差別されている現状があります。金さんたちがそうであつたように、感染症になった人やその家族が地域社会から排除される現状はいま、再び繰り返されています。私はこの現実を許すことができません。だからいま、私に何ができるのかと考えたとき、金さんの口癖が頭をよぎりま

す。「正しく知って正しく行動する。」私は必ず、このことを胸に、金さんやこの島で生き抜いた人々のことを伝えながら、社会の不条理に真っ正面から向き合い、まっすぐに生きていきます。

私は六月十九日、緊急事態宣言が解除され、ようやく他県への移動が可能になったその日、療養所にある金泰九が眠る納骨堂の前で、目を閉じ、手を合わせ、静かにそう誓った。

ワタシノイチブニナリユクソイツ

やまざき
山崎
まさる
大

そいつは静かになってきた。そいつは、物心つく時ぐらいに、卵が産み落とされたみたいに、私の体の中に入りこんできた。そいつは小学校の時には幼虫に成長していた。その時には、私の心の中に悪いことをしたいという思いがちよっと浮かんでいた。

中学校卒業時、そいつはサナギのようになっていた。私は体の中のそいつを恐れるようになっていった。そいつは少しずつ育っていた。私はそいつから逃げるように自分を鍛えた。だがそいつは消えていくどころか強くなるみたいだった。高校のころ、ついにそいつはサナギから成虫になる段階になった。その頃、私は精神科に通院をするようになった。薬を飲めばそいつは消えるかもしれない。そう思い私は忘れずに薬を飲んだ。だがそいつは消えなかった。

高校卒業後、私は浪人生になった。その頃、そいつは強くなって私の意識をむしばんできていた。だが私は薬が効かないと思い、薬を飲まない期間を作った。

一か月後、私は入院していた。そいつは統合失調症という成虫になり幻聴として私に攻撃するようになっていた。私にはやはり薬が必要だった。

退院後、両親とベテルの家に行ったことがある。その時、その施設の方が「幻聴と闘わないで仲良くやっていこう」と言っていた。私はその意味がなかなか分からなかった。相手を弱らして自分が強くなれば相手はいつか消える、思っていた。その考えが変わりはじめたのは二度目の入院後である。私はあるおじさんと出会った。いろいろな話を聞く中で、私はそのおじさんにも悪いことをしてしまいう心があることを知った。別のある人が「いい人が大半で悪い人が少しいるのが社会で、それが人なんだよ」と言っていたのを思い出した。私には衝撃的であった。誰も悪い心があるんだ。そういつた自分を認めながら生きているんだ。闘ってはダメなことを知ってから、そいつは少しだけ私にやさしくなった。

大学卒業時、私は大学教員と話をした。その中で、「統合失調症による障がいと離れてしまった人がいる自分が許せないです。今まで頑張ってきた自分が虚しくて」と言った。「そうだとしても、これから会う人に良くしていくしかないじゃん」とその方は言った。

私はハツとした。私は自身の障がいを認めていなかったのだ。私は心の中にいるそいつをいつか追い出してみせると自分を追い込んでいた。結局そいつはいなくならず強くなって私に攻撃していた。けれど、多分そいつは障がいなんだ。それに気づいた時、そいつは障がいという私の体の一部分に生まれ変わり始めた。

私は私が信じる道を行く。私には幻聴が顔を出す時間と顔を出さない時間がある。障がいが出す時間が長くなると、私は不安になりさらに幻聴が聞こえることもある。だが、障がいを抱える私”は私自身で、他者とは違う私そのものである。それは障がいがあってもなくても変わらない事実だ。私はかけがえのない一人の人間なんだ。

それに気づいてから私はさらに次のような気づきをした。大切な人たちを失った時、私は多分障がいが出していたんだ。もうその人たちは顔を背けて私の方を向いてくれないけれど、私はこれからの人生を誠実に生き続けよう。そして何年もたつていつかその人たちが私に顔を向けてくれたとしたら「あの時はゴメン。実はあの時障がい

あって」と勇気を振り絞って言おう。それで私からまた顔をそむけてしまったらそれはそれで仕方がない。私は、私が”障がいを抱える私”を他人に曝け出す勇気を持つところこそが、障がいがある人とならない人の心のふれあいにつながると思う。同様に、障がいを理解しようとしないうちや障がいを理解しようとしてくれる人たちとの心のふれ合いも大切だと思う。それだけでなく、障がい当事者の自身の障がいとのふれ合いも大切だと思う。なぜなら、障がい当事者は自身の障がいから逃避した生活を送っている人も多いと思うからだ。

さらけ出す時のために、私はそいつを前向きに迎え入れなければならぬと思う。私自身が障がいを持っていることによつて後ろ向きになっていたら、その人たちは、障がいを抱える私”を前向きに受け入れられないと思うから。私の中の障がいが出して誰かに頼りたいときは、手を差し伸べてくれた人の手をしっかりと握る。そして例え誰も手を差し伸べてくれなくても、自分から頼らせてほしいと手を差し出す勇気が必要であると思う。そして休むときは休み、疲れた体を癒す時間を作る。

敵が見えなかった恐怖から少し解放され、私は自分に余裕がで始める。そして共生社会の敵であるそいつはいなくななり、今は社会に受け入れられるだろう障がいとして私の一部分になりつつある。日々障がいとふれ合うことで、

私は自身の障がいへの理解を深めている。

障がいを抱える私は、障がいとともに、障がいのない人に分かるよう、うまく自分の特性を伝えたい。そのために、統合失調症当事者である私をできるだけ正確に表現できるよう、努力していけたらと思う。だってそいつが自身の一部になりつつある私は、そいつが敵にみえていた時よりずっと自分のことがわかるはずだから。

◇心の輪を広げる体験作文◇